



® 平成 29 年 12 月 21 日 (木)

No. 14595 1部370円(税込み)

発行所

一般財団法人 経済産業調査会

東京都中央区銀座2-8-9 (木挽館銀座ビル)

郵便番号 104-0061

[電話] 03-3535-3052

[FAX] 03-3567-4671

近畿本部 〒540-0012 大阪市中央区谷町1-7-4

(MF天満橋ビル8階) [電話] 06-6941-8971

経済産業調査会ポータルサイト <http://www.chosakai.or.jp/>

特許ニュースは

- 知的財産中心の法律、判決、行政および技術開発、技術予測等の専門情報紙です。

定期購読料 1カ年61,560円 6カ月32,400円  
(税込み・配送料実費)

本紙内容の全部又は一部の無断複写・複製・転載及び  
入力を禁じます(著作権法上の例外を除きます)。

## 目次

☆「ゆるスポーツ」～スポーツを通じて課題を  
「ゆるく」解決～…………… (1)

☆特許庁告示第6・7・8・9号 …………… (7)

# 「ゆるスポーツ」 ～スポーツを通じて 課題を「ゆるく」解決～

三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社 副主任研究員  
萩原 理史

## 1. はじめに

本年10月28日(土)と11月29日(水)に2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会まで1000日を切り、各地ではイベントが開催されるなど、少しずつ東京五輪に向けて雰囲気が醸成されつつある。こうした中で、1964年の東京オリンピックについて簡単に振り返ると、各種資料や当時を知る方からの話を聞いても国民的なイベントであったことが

うかがわれ、東京、ひいては日本において様々な影響を与えたといわれる。五輪の単発的なイベントにとどまらない長期的でポジティブな影響を、国際オリンピック委員会(IOC)は「レガシー」と称しており、IOCが最も力を入れているものの一つとされている。1964年の東京五輪におけるレガシーの例としては、オリンピック関係のスポーツ施設に加え、「東海道新幹線」や「首都高速道路」が整備されたことや、



特許業務法人 アイミー 国際特許事務所

所長 伊藤 英彦\*  
弁理士  
副所長 竹内 直樹\*  
弁理士  
弁理士 松田 美幸子\*

副所長 森下 八郎\*  
弁理士  
弁理士 白井 あゆみ  
弁理士 吉田 博由

\*: 付記弁理士(特定侵害訴訟代理)

〒542-0082 大阪市中央区島之内1-21-19 (オリエンタル堺筋ビル)

TEL: 06(6120)5210

FAX: 06(6120)5211

E-mail: [info@imypatent.jp](mailto:info@imypatent.jp)

URL <http://www.imypatent.jp>

ピクトグラム (案内標識) が普及するなど、まず社会インフラの変化が指摘されている。また、ソフトの影響として、「ママさんバレー」とか「スポーツ少年団」のようなスポーツ文化的なものもあれば、経済・産業面へのレガシーも指摘されており、亀倉雄策氏のポスターを通じてデザイナーが職業として着目されたほか、IBMのビックデータセンターなどの情報システムの重要性が着目されるなど、スポーツ関連分野だけではなく、東京五輪によって様々な産業界にその影響が波及したという。

戦後に急成長を遂げていた当時に比べて、「失われた20年」といわれている現在において、当時のようなレガシーは生まれるのだろうか。また、当時よりも価値観は多様化しており、人々はスポーツに関心を持ち続けているのだろうか。そして、2020年の東京五輪は国民的なイベントになるのだろうか、そのような東京五輪に対する疑問は尽きない。実際に、スポーツに関心がある人々の規模を測る手段として、一つの切り口としてスポーツに取り組む人からみていくことが考えられる。文部科学省によると、スポーツ人口は長期的に増加してきているが、直近では減少してしまった。データの出展の連続性が無いため確定的なことは言いにくい、スポーツ以外の関心も高まっていることも一つの要因ではないだろうか。

宇野など (2015) はスポーツが好きな人以外も五輪を楽しめるように、サブカルチャーの「文化祭」のような構想を提案している。価値観が多様化して

いる中で、スポーツだけで国民的なイベントに昇華できるのか疑問が残ることから、こうした提案は納得感もある。

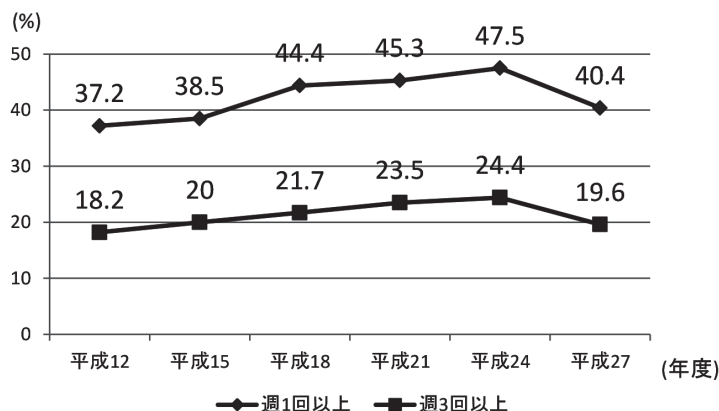
こうした価値観が多様化している中で国民と五輪を繋げるような可能性として、本稿では「ゆるスポーツ」(商標登録第5851480号)を紹介したい。なお、本稿の執筆にあたっては、一般社団法人世界ゆるスポーツ協会の理事／事務局長の萩原拓也氏に多大な協力をいただいた。

## 2. 「ゆるスポーツ」とは何か

「ゆるスポーツ」とは、「年齢・性別・運動神経に関わらず、だれもが楽しめる新スポーツ」のことを指し、一般社団法人世界ゆるスポーツ協会などによって、創作されたものだ。代表的な「ゆるスポーツ」としては、ボールが赤ん坊のように泣く「ベビーバスケット」、声に反応する紙相撲「トントンボイス相撲」、イモムシになりきってラグビーをする「イモムシラグビー」などがあげられ、2017年11月末日現在では31のスポーツがウェブサイトで公開されている。

この「ゆるスポーツ」はじわじわと広がり、各種報道でも取り上げられ、開始から2年ほどで数万人が「ゆるスポーツ」を楽しんでおり、それらを支える、スポーツの考案する人 (スポーツクリエイターと呼ばれる)、映像やロゴなどのアートディレクター、スポーツ器具のものづくりに携わる人など、協力する人はすでに約200名を超えているという。

図表1 成人の週1回・週3回以上運動・スポーツを行う者の割合の推移



資料) 「体力・スポーツに関する世論調査 (平成24年度まで)」及び「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査 (平成27年度)」に基づく文部科学省推計より一部抜粋